

# 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

2012年10月21日 被災地（宮城県 石巻市、名取市）にて実施

## 始まり／Preamble

国連本部（ニューヨーク）に於いて正式に世界に向けて  
**浦和レッズの社会貢献活動**が報告（レポート※1）されたのは、  
2009年3月11日だった。

国連本部にて、スポーツを通じての平和の文化を提唱、提携した初めてのプロクラブチーム  
だった。それは奇しくも、2011年3月11日に起きた東日本大震災の2年前だった。

---

※1 国連事務総長特別顧問、国連ミレニアム開発目標委員会、国連スポーツ局、  
ユネスコ国連事務所、国連協会事務総長、等の出席のもとで正式に発表された。  
(参照URL) <http://founap.org/090312.html>

---

国連は、『国連ミレニアム開発目標(MDGs)』の達成に於いて、平和プログラムを  
推進する為にはスポーツを重要手段として認識している。

規則とチームワーク、フェアプレーに敬意を払うスポーツの原理は、国連憲章の原理と  
一致しており、又、スポーツには、人々を歓喜させ、エネルギーを与えるパワーを  
秘めている事から、スポーツは、理解と相互尊重を促進し、世界中の人々を

『平和と寛容の文化』を築く手助けとなり、スポーツそのものが世界の平和維持活動と  
国連は考えている。

国連関連機関や国連NGOが浦和レッズのハートフルクラブ事務局やスタッフメンバーの  
活動を注視している要因の一つに

**『スポーツ（サッカー）を通じた平和維持活動の実施（アクション）』**  
が挙げられる。

FIFAやJFA等の各協会の社会貢献活動の在り方は言うまでもないが、クラブチームだから  
こそ展開出来る有意義で、かつユニークなレッズの活動実施（アクション）は  
アジアを始め多くの国々で常に注視されている。

# 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

## レッズの選択 / Decision taken by Urawa Reds

リーグ戦が佳境に入る終盤戦。

それでも浦和レッズ事務局がこのプログラムの重要性を感じている理由は明確だった。

### 『現在（いま）だからこそ、意義のあるプログラム』

に対する浦和レッズ事務局のアクション（行動実施）は早かった。

### 2012年10月。

宮城県 石巻市 / ①上釜ふれあい広場 ②名取市 増田小学校グラウンド

私達はすぐに浦和レッズ事務局の意図を察した。

それは石巻市の

**上釜ふれあい広場が『生まれ変わったばかりの10月』**にこそ意味があった。

### 広場（グラウンド）が生まれ変わるには!?

レッズはその意味を —— 、

レッズはその意義を —— 、

**悟っていたのかも知れない…。**

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### 冥福を祈るレッズの鎮魂／ May Their Souls Rest in Peace

#### 『石巻、上釜ふれあい広場（グラウンド）』

この広場はただ復興計画の中で、被災地にまた新たなグラウンドが完成したという簡単な話ではなかった。

かつて石巻市民に愛されていたこの広場は、3.11以降、その役割を**大きく変貌させた**。大震災から1ヶ月後、当時の石巻地域は尊い命を亡くされた犠牲者の火葬が追いつかない状況だった。

2011年4月。

当時、石巻市だけで判明された犠牲者数 2,500人。

行方不明者数は 2,800人を越えていた。

その広場、約2ヘクタールの敷地はやむなく仮埋葬地となり、遺体安置所と変貌していた。

#### 『土葬 200遺体』

そこは深さ約1.5メートルの穴を21列掘り、犠牲者の方々を

『**祀（まつ）った地**』であった。

悲しみの中の手厚い追悼式典を経て、その地（グラウンド）は地元の方々の強い要望と情熱により、美しい人工芝のグラウンドとして新しく生まれ変わった。

#### 『2012年10月1日』

『**新たなスポーツの聖地として一步を踏み出す**』事に、  
少しでも… 役に立ちたいという

『**レッズの想い**』と『**レッズの鎮魂**』が、そこには確かにあった。

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### フラッグは靡く～/The Flag Flutter in the Air

上釜広場には石巻サッカー協会のご助力によって小学1年生から中学3年生まで  
総数160名の子供達が集まった。

小学1年生 19名 / 2年生 19名 / 3年生 28名 / 4年生 27名 / 5年生 15名 / 6年生 27名  
中学1年生 / 5名 / 2年生 5名 / 3年生 5名 / +他10名

(サッカー経験の有無を問わず、当初の予定よりも多くの子供達が集まった)

名取市増田小学校 約90名

レッズのスタッフが、子供達を応援している保護者の方々や地域のクラブチームの  
関係者全員にレッズのフラッグ(旗)を配る。

『今日は、子供達と皆様の為にレッズのメンバーは精一杯、  
今日の活動(サッカー交流会)を頑張ります。

皆様も、頑張っている子供達の為に——、

**このフラッグ(旗)を揚げてエールを送って頂けますか!?!』**

**フラッグは風に靡く。**

『この地の想いを忘れない為に』

『この地に再びサッカー(スポーツ)の感動を呼び起す為に』

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### データ推移に見える現状① / Confront the Current Condition through the Interval of Data

私達の医療団は今回も唾液分析腺分泌による**ストレスチェック**を敢行した。  
サッカーを通じての交流会開催時に行った子供達と保護者、そしてサッカー交流会に参加されなかった子供達、延べ100名からご同意を得て採取させて頂いた。

第一回目の採取は交流会開始前である。

私達の医療団の一人である後藤幸将医師がそのデータを見ながら呟く。

『データは顕著ですね。一見すれば元気にサッカーに参加する子供達といった風情ですが、例えば震災による被害が少なかった地域の同年代の子供達と比べて**平均の数値が約2倍検出されてますね**』

---

この検出データはNY本部を通じて国連事務局（OCHA）やWHOに報告される。

交流会の内容は浦和レッズ公式HP『東日本大震災復興支援 子供たちとサッカー交流会』を参照して頂きたい。

---

通常10～20の唾液アミラーゼ数値が30～50を越え、中には9～12歳の男女で100を越える子供達も少なくなかった。

地元協会の方からの挨拶があり、**それは『黙祷』から始まった。**

クラブメンバー紹介、挨拶、そして交流会が開始された。

**医師**は、開始前の想定データをはるかにオーバーしている現状を目の当たりにして、保護者の方々や、子供達を指導されている地元クラブチームのコーチ達に要因を検証する為の**メディカルチェック**を試みた。

秋の空に映える人工芝の上を駆けまわっている子供達。

平和の象徴の様な**その風景は一変した。**

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### ～地元サッカークラブの指導者の方々から～

『見て下さい! 3.11以降 自分の大切にしていたサッカー用具を津波によって何もかも無くした子供達は、どこにいても（各地からの支援によって送られた）自分の名前の書いたボールや、換えのシューズに無意識のうちに、つい目をやってしまうんです。それは**大切なモノを失う怖さ**からくるのでしょうか…』

『私達コーチや、保護者が常に目を配ってやらないと、子供達は**我慢してしまう癖**が極端についてしまった様に感じます。我慢するのはとても大切なことかも知れませんが、成長期に小さくなってしまったシューズを痛くても、キツくても、大丈夫といって足の指が血マメで腫れ上がるまで我慢して履き続けるのは異常です。子供達は無意識のうちに我慢しなければいけないと感じ過ぎているのでしょうか…』

『ゴールした時の喜び。ゴールを奪われた時の悔しさが、サッカーの醍醐味の一つです。3.11前は相手チームのことを想いやれ! と叱る程、子供達はゴールをした時に喜びを爆発させていましたが、それが今では懐かしいですね。  
**もっと喜んで良いんだよ…**と、心の中で呟いています』

『先月の試合中にこの様な出来事がありました。サイレンが鳴り響いた時、今まで元気にプレーしていた子供が、顔色を変えベンチに一目散で逃げ込み、ガクガクと震え出したのです。サイレンの音が、あの日のつらく厳しい出来事を思い出すフックになったのでは!? と、後から心療内科の先生に聞かされました。今も心の奥底にある**本人も気付かないトラウマ**があるのだと改めて知らされました。あの時の子供の姿は生涯忘れられないでしょう』

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

～子供達を温かく見守る保護者の方々から～

『地元ではグラウンドまで子供達を車で連れて行かなければならないので、冬場の寒風が吹き荒れる中で待っていることが少し億劫になる時も以前は正直ありましたが、3.11以降 子供達がグラウンドで**サッカーが出来ることの幸せが、どれ程 嬉しいことか…!**を知らされました』

『ボールを見て下さい!? 殆どの子供達が使用しているボールは、全国の方々から支援して頂いたモノです。

3.11で総てを失って、  
**膝を抱えて泣いていたあの時の子供達の姿。**

3.11以降、  
**初めて支援のボールとシューズを大切に抱えて眠っていた子供達の姿。**  
今でも目に焼き付いて離れません…』

## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### データ推移に見える現状②／Confront the Current Condition through the Interval of Data

サッカー交流会のプログラムが進むにつれ、ストレスホルモンが減少していったのは言うまでもなかったが、その中でも**二つの項目は私達の医療団を驚かせた。**

一つはサッカー交流会に参加している子供達と、参加していない子供達の数値の変化が顕著に表れた。

サッカー交流会参加者の殆どの子供達の数値が40～50あった当初の数字から、最高でも15（30以下は異常が見当たらないとされている）、平均8～12に**著しく減少**したのに比べ、サッカー交流会に参加していない子供達の数値はほぼ**変化がなかった。**

もう一つは、サッカー交流会でレッズの選手達と元気にサッカーを楽しんでいる子供達を見守っている保護者の数値が**著しく減少**したことだ。

保護者の方々の中で、50代の男性2名。40代の男性5名。40代の女性13名。30代の男性3名。30代の女性9名の唾液チェックをしたところ、2名を除いてその数値は平均で**約半分に減少**していた。

つまり、元気にグラウンドを駆け巡る我が子を見ている保護者はその保護者自身、**ストレスホルモンが低下**していたのだ。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）を負ってしまった方々の症状を見極めるのは難しい。まして治療は、長い時間を要する。

『不安障害』や『フラッシュバック』と向き合い、『ビタミン療法』や『食事療法』『運動療法』等、自然治癒力を活かした精神療法的治療の具現化を今後も検証していかなくてはならない。



## 【国連の友・浦和レッズ 共同プログラム】 ～東日本大震災 被災地復興支援 子供たちとのサッカー交流会～

### ごく在り来たりの日常～／Ordinary Life

レッズの選手達のバスに手を振る子供の一人が呟く。

『**もっとサッカーをやりたかったなあ…**』

バスが去った後、いつまでもグラウンドを見つめる子供達の背を、  
優しく見つめていた保護者の方々が  
フラッグを抱（かか）えながらゆっくり車へ誘う。

『さあ、行こうか!? 今日はレッズの選手と一緒にサッカーが出来て良かったね』

ようやく、子供達はそれぞれの車に乗り込んで、窓を一気に開けながら、  
仲間（友）に向かってこう叫んだ。

『**それじゃ 又 来週ね!**』

『**又 来週!**』

『それじゃ 又 来週ね…』

その子供達の言葉は、『**ごく在（あ）り来たりの何気ない彼等の日常**』が、  
押し潰されそうになる程、小さいけれど…、  
一つ一つ、  
一つ一つ『**以前にあった日常**』がごく僅（わず）かにせよ、  
**確実に戻っているのだと信じたかった。**

---

上記和訳文は、国連の友NY本部を通じ提出された各国連関連機関及び国連NGOへの報告書（英語原文）より  
抜粋しています。